



©成田篤彦

かずさの博物誌

オオソリハシシギ ～優しそうな目の大型シギ～

文・写真／成田篤彦

▲オオソリハシシギ

全長41cm。旅鳥。ゴカイやミミズ類やタマキビなどの小形の貝類、ゴミシなど食べる
=2010年9月5日 木更津市畔戸（成田篤彦撮影）

鏡でのぞいてみるがどこにいるか全く分からぬ。ていねいに泥浜を見渡してやつと岸辺近くにいるのが分かった。しかし、肉眼で見るともう分からぬ。「ベテランの方はよく気付くな。さすがだ」と感心した。同時にオグロシギの見事な保護色にも感服した。

波頭に白い泡を浮かべ、音もなく走るようにならん。満ちてきた。

「そろそろ引き上げるか」と腰を上げた。すると、まだ、潮が満ちてない沖合の干潟の海辺で数十羽の小鳥たちが陽炎の中で薄らと見えた。

「何がいるのか?」重い望遠レンズ付きのカメラを肩に下げ歩み寄つて行つた。長靴で干潟を歩くと砂底に足がずしりとめり込み転びそうになる。

少し接近するとダイセンの群れが海中にいるのが分かつた。そして、その手前に一回り大きなシギが二羽いた。くちばしが長くすらりとして

九月の初旬、一猛烈な暑さが和らぎだな？」と感じ、干渴へ撮影に出かけた。

誰もいない河口の流木に腰掛けた。

そよ風が吹き、手前の潮だまりでは数羽のダイサギが大股で歩いていた。

「静かだな」。

そのうち、潮が河口水路に沿つて、

いるが、海水に漫かつてゐるので脚の長さが分からぬい。彼等は目をつぶつていたが、時々ゆつたりと海辺を歩き、くちばしを根元まで砂底に差しこみえさを探つていた。大きさや形からオオソリハシシギかオグロシギのどちらかだ。



▲オオソリハシシギ2羽とソリハシシギ(右端)
=2010年9月5日 木更津市畔戸(成田篤彦撮影)

自宅で写真をパソコンで拡大すると二羽ともくちばしが反り返つていた。オオソリハシシギだ。脚ががつちりしていて、目が像のそれに似ていてたくましく優しそうな水鳥であった。また、干潟では気付かなかつたが、ソリハシシギが一緒に写つていた。「大きさがこんなに違うのか」とびっくりした。

リハシシギ。反り返らず、脚が長く、飛んだときに尾の先が黒ければオグロシギだ。

急がずに進み、ときどき腰を下ろして写真を撮り、再び近寄った。

「飛べば分かるのだが」と思ったが、彼等は目を閉じ休息し始めた。

結局、潮が満ちてきて充分に近づけず、その場ではどちらか区別でき

帶 亞寒帶に繁殖地をもち、
して、春・秋に渡来する。

約一mの泥浜にいる」と位置をしつかり記憶しておいて、やつとレンズを入れた。彼?はくちばしを泥に垂直に深くさしこみ頻繁にえさをあさつていた。

ところで、オオソリハシシギはユーラシア大陸などのツンドラ地帯で繁殖し、南アジア、オーストラリア、ニュージーランドなどの海岸で越冬する。上総では春と秋の渡りの季節に通過する旅鳥だが、訪れる数は、春に圧倒的に多い。

オグロシギはユーラシア大陸の温



▲オグロシギ

全長40~42cm。旅鳥。春は5月中旬、秋は8~10月に見られる。ゴカイ類、貝類などを食べる
=2010年10月3日 木更津市畔戸(成田篤彦撮影)

それでも青空の下、広大な干潟に立つ大型シギの姿は美しい。また、鳥の名前が分かってると野鳥観察は楽しくなる。

近頃は大型のシギが訪れるることはとても少ない。しかし、彼等はほぼ毎年上総の海辺に訪れるから、皆さんも観察会に参加され、望遠鏡をのぞいてみてはいかがでしようか。

参考までに 小櫃川河口干瀬では
オオソリハシシギは一九九八年五月
に二十三羽などの記録があるが、オ
グロシギの訪れる数はせいぜい一〇
二羽。また、環境庁自然保護局野生
生物課（一九九七年「シギ・チドリ
類渡来湿地目録」）によれば、日本
に渡来る推定最少個体数はオオソ
リハシシギが十五万羽、オグロシギ
は十六万二千羽だそうだ。

〔参考文献〕
千葉県の自然誌本編7、桑原和
『東京湾の鳥類』たけしま出版

和之外2000

◎写真・文章の無断転載を禁じます。